



会員活動報告

論文掲載 周産期リエゾンナースによる周産期メンタルヘルス管理

2025年8月、Asian Journal of Psychiatry誌に「Managing perinatal mental health with perinatal liaison nurses: A hospital-based study」が掲載されました。この論文は、当学会員で精神看護専門看護師である山田恭子さん、加古川中央市民病院精神神経科の大谷恭平先生らが執筆されたもので、周産期医療に精神科リエゾンナースが専任で配置され、実践されたアウトカムが報告されています。結果には、精神科医および／または周産期リエゾンナースの介入を受けた妊婦・産婦の特徴が示されており、また研究期間中に自殺や予期せぬ虐待がなかったことも示されています。

周産期メンタルヘルスの改善には、精神科医と精神看護専門看護師との連携の強化が求められていますが、本論文は、周産期メンタルヘルスにおける精神科医とリエゾンナースの役割や連携のあり方に示唆を与えています。また、これまで精神看護専門看護師の機能や、リエゾンチームにおける役割を明らかにした論文はほとんど見当たらず、その意味でも大変貴重な論文と言えます。

なお、筆頭著者である山田恭子さんは、2025年7月30日にご逝去されました。大谷先生からは、病氣療養を続けながらも、最期までリエゾンナースとしての専門性と使命感を失うことがなかったこと、またその温かく誠実なお人柄と確かな専門性は、多くの患者さん・ご家族・医療スタッフにとってかけがえのないものであったと伺っています。

謹んで山田恭子さんのご冥福をお祈り申し上げます。

(理事/玉木敦子/神戸女子大学看護学部教授)



Managing perinatal mental health with perinatal liaison nurses: A hospital-based study
Asian Journal of Psychiatry, 2025
Aug 14;112:104661.
doi :10.1016/j.ajp.2025.104661.

(掲載については、ご遺族および関係各位のご了承をいただいております)

ワークショップ開催報告

日本精神保健看護学会 第35回学術集会

2025年5月31日・6月1日に開催された日本精神保健看護学会第35回学術集会（金沢市）において、『精神障害を持つ妊産婦と家族への看護ケアと多職種・多機関連携による支援』をテーマにワークショップを催しました。企画者は、日本周産期メンタルヘルス学会の会員でもある精神看護学教員と精神看護専門看護師7名です。当日は、企画者に加えて、総合病院、精神科病院、母子医療センター、訪問看護ステーション、教育機関など様々な場で活躍する、若手からベテランまでの看護師、助産師ら28名の方が参加されました。

ワークショップでは、生活・育児のセルフケアの視点から、双極症をもつ母親とその家族の生活・育児上の困難やケア・ニーズ、支援方法を共に学び、また活発なディスカッションを通して、様々な場におけるケアの実際や多職種・多機関との連携について理解を深めることができました。

精神看護領域での周産期メンタルヘルスへの関心をさらに高めるとともに、多職種との連携を促進していけるよう、これからも継続して活動していきたいと考えています。

(理事/玉木敦子/神戸女子大学看護学部教授)



<連載企画> 私たちのまちのメンタルヘルスケア活動 12 困ったときに電話できる関係性を — 地域で育む周産期メンタルヘルス

五十嵐友里（公認心理師）¹⁾²⁾³⁾ 安田貴昭（精神科医）²⁾³⁾

1)東京家政大学 2)埼玉医科大学総合医療センター

3)一般社団法人メンタルケア・ネスト

周産期医療の現場では精神科との連携が十分に整わず、助産師や産科医が個々に対応を模索している状況も少なくありません。

私たちはこうした課題に対応するため、地域医療に根ざしたメンタルケアシステムを試行しています。医療者と患者家族双方を支えることを目的とし、①患者リスクに応じた支援体制の整備、②専門家による定期的な助言、③地域資源との橋渡しに取り組んでいます。

このうち「地域資源との橋渡し」は、持続的な周産期メンタルヘルス支援を実現する要になります。具体的な例として、先日地域の産科クリニックと精神科で合同の勉強会・交流会を開催し、互いの日々の実践を共有しました。産科スタッフが抱える「メンタルケアに関する具体的な疑問」に精神科医が直接答える場、精神科医の先生やスタッフからの精神科で行っている支援について講演をしてもらう場、互いに色々な疑問を共有し合う交流の場を設けることで、顔の見える関係が育まれました。「これからは困って電話したら、〇〇さんいますか？って尋ねてもいいんですね」と最後に話していた産科スタッフの言葉が印象的でした。こうした小さな積み重ねが、患者さんご家族を地域全体で支える基盤になると実感しています。

今後も地域資源の橋渡しをしながら、周産期の家族が「ここで安心して子育てできる」と思える環境づくり、周産期医療のスタッフが「ここで安心して患者さんご家族をサポートできる」と思える医療環境作りに取り組んでいきたいと考えています。



駅前分院の院長は児童専門で診ている...

企画・発行：日本周産期メンタルヘルス学会 情報関連委員会

当学会では会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。
ご意見やご要望がありましたら事務局までお知らせください。